

飛鳥池遺跡の調査

—第112次

1 はじめに

飛鳥池遺跡は、これまでの調査によって、飛鳥寺の寺域の南東から「人」字形に延びる谷に面した丘陵斜面に、7世紀後半から8世紀初頭にかけての各種工房群が配置されたことが判明している。西側の谷筋は、谷の合流点から50mほどで丘陵に遮断され、行き止まりになるが、この谷筋の奥部で金・銀・ガラスの加工がおこなわれていた。一方、東側の谷筋は、全長250m近くに及び、銅・鉄を中心とした工房群が展開する。その最奥部には、明日香村教育委員会が調査した亀形石槽が位置する。

今回の範囲確認調査は、この東側の谷筋の工房群南限の解明を主たる目的とした。同時に、近接する酒船石遺跡と飛鳥池遺跡の境界の把握が調査の焦点となった。

調査地は、飛鳥池遺跡で最も南に位置していた第98次調査区から、さらに南へ50m離れた旧健民グラウンド敷地で、亀形石槽の北60mの地点である。旧健民グラウンドを東西に横断する吉野川分水に北接して、東西65m、南北36mの不整形な調査区を設け、1810㎡を発掘調査した。2000年12月26日からの重機掘削を経て、2001年1月9日より本調査を開始し、3月12日に終了した。

2 旧地形と基本層序

調査地周辺の旧地形は、酒船石遺跡から北東に派生した丘陵が、飛鳥池遺跡の東を限るように北に伸びていた。この丘陵は、旧健民グラウンド造成(1967~68年)など幾度かの工事によって大きく削られ、改変を受けた。また、万葉ミュージアムの敷地造成工事による地形の改変も加わって、かつての地形を窺うことができないほどの変貌を遂げている。

このため、調査では、削平を免れて地下に埋没する丘陵斜面と谷筋を検出することに精力を注いだ。その結果、調査区東端に残存する丘陵から急傾斜で谷底に降る丘陵西斜面と、それにつながる谷筋を検出することができた。調査区の東西両端での遺構面の比高は約10mに及ぶ。

調査区東半部で検出した丘陵西斜面は、途中に上下2段のテラスが造り出されており、それぞれのテラスに遺構が存在する。一方、調査区西半部で検出した谷部は、

調査区外の西方にその最深部が位置するために、南の上流部および東の丘陵から流下した水流による複雑な堆積状況を示している。

現地表下5mまでがグラウンド造成時の埋め立て土であり、その下でグラウンド造成前の水田面を検出した。さらに、旧水田面下1mで鎌倉時代の遺物包含層、その下2mで平安時代の遺物包含層、さらにその下2mで古墳時代の遺物包含層に達する。主な遺構は、平安時代の遺物包含層直下で検出した。

3 検出遺構

丘陵上段テラスの遺構

丘陵上段付近は、丘陵西斜面(標高116.5~117.0m)をカットし、一部に整地をおこなって幅4mのテラスを造り出している。テラスの造成時期は古墳時代とみられるが、平坦面は健民グラウンド造成直前まで遺存していたようで、近・現代の水路などが重複する。

テラス上で検出した遺構は、斜行溝1条、炉跡1基、石組遺構1基などである。

斜行溝 北東から南西に走る最大幅80cm、深さ15cmの素掘溝。溝内に花崗岩自然石が散乱する。埋土から古墳時代の土器片が少量出土したが、開削時期は不明。既に削平された丘陵部から下段テラスへの排水路として機能したようである。

石組遺構 上段テラスの縁辺を整地した赤褐色粘質土の崩落防止用石垣。長辺1mの大型花崗岩をテラス縁に設置し、周囲に人頭大の花崗岩を乱雑に並べる。斜面の積石の大半は崩落して遺存しない。構築時期は古墳時代以降、飛鳥池工房期以前であり、酒船石遺跡との関係が推測される。



図91 石組遺構(北から)

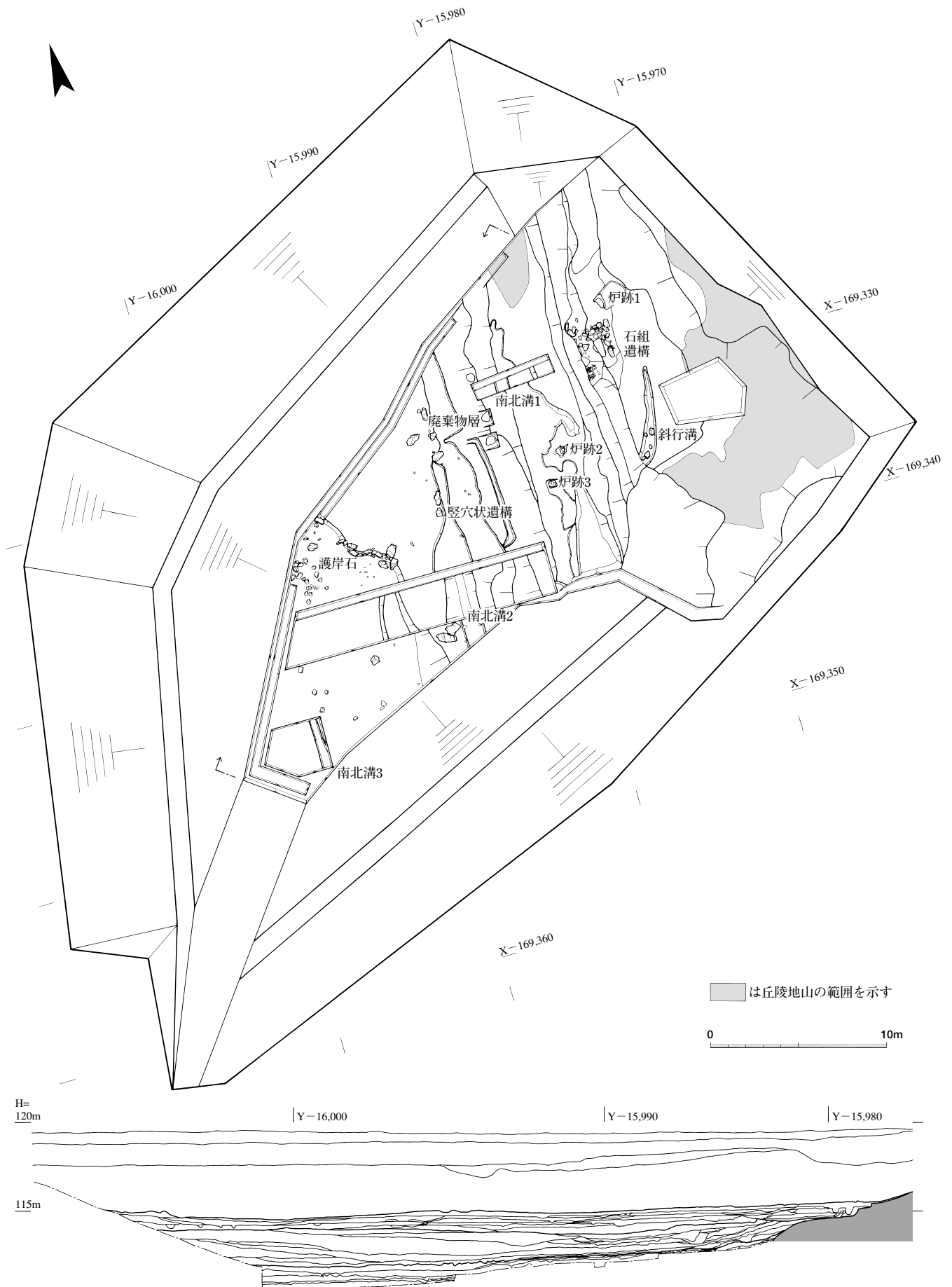


図92 第112次調査遺構図・北壁土層図 1:300

炉跡1 長辺60×短辺30cm、深さ15cmの楕円形をしており、テラスの整地土である赤褐色粘質土上に構築されている。下段テラスの炉跡と同様に、飛鳥池工房期の炉跡と推測されるが、被熱による硬化の度合いが弱く、操業期間は短時間とみられる。

丘陵下段テラスの遺構

下段テラスは、上段テラスの1.5～2m下にある幅3.5m前後のテラスである。丘陵上方からの水流によって大きく攪乱を受けるが、炉跡2基と廃棄物層、古墳時代の南北溝などを検出した。

炉跡2・3 2基とも、地山土で整地した工房作業面に構築されている。

炉跡2は、工房作業面を直径60cm、深さ15cmほど掘り窪め、炭を充填した湿気抜き基礎地業が施されている。同位置で改築されており、上下2時期の炉跡が重なる。上層の炉跡は、35×30cmの楕円形で、赤褐色に被熱した炉床の中心部に、灰色に硬化した炉底が残る。北東方向に羽口の挿入口が突出する。また、炉跡に接するように北側と南側で、半裁した平瓦が立てられていた。炉構築時になされたものと思われるが、障壁の役割を果たしたのであろうか。下層の炉跡もほぼ同規模である。

炉跡3は40×25cmの長方形で、焼土に混じって、崩壊した炉壁が散乱する。

これらの炉跡は、飛鳥池遺跡の調査で数多く検出した炉跡と共通した構造をもつが、現時点では鋳銅用の炉か鍛冶炉かは未詳。工房作業面からは、7世紀後半の土器

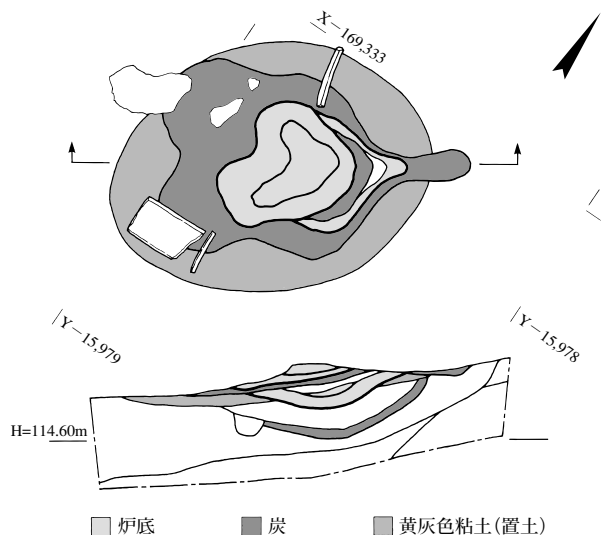


図93 炉跡1実測図 1:20

や鞆羽口、飛鳥寺所用瓦などが出土している。

廃棄物層 工房作業面から1mほど低い谷側斜面に、炭や焼土が薄く堆積する。堆積層中には7世紀後半の土器が含まれる。廃棄物層は数箇所にと点在するのみで、面的な広がりはない。炉跡と廃棄物層の位置関係からみて、北西方向に向かう谷の水流により、後世浸食されたものと思われる。また、廃棄物層直上には、丘陵上方から流れ込んだ古墳時代の土器を含む土が堆積している。

南北溝1 下段テラスの一部で断ち割り調査をおこない、工房作業面の下層から幅80cm、深さ30cmの古墳時代の南北溝1を検出した。テラスの造成時期を知るうえで貴重な知見である。

谷部の遺構

谷部は、基本的には丘陵を浸食した砂層堆積で埋没する。旧水田面下3mで、平安時代の遺物を包含する腐植土層を2層確認した。この腐植土層は、谷に繁茂した草木により形成されたもので、谷が沼沢もしくは湿地と化していたことを物語る。いずれの層にも黒色土器が含まれ、短期間に汀線が変化したものと思われる。

護岸石 上層・下層それぞれの沼状遺構の汀線には、大型の花崗岩を不規則に配置した護岸がなされている。この護岸石は、いずれも酒船石遺跡で使用された石材の転用とみられる。下層の沼状堆積には酒船石遺跡特有の天理砂岩(凝灰岩質細粒砂岩)の切石が散乱しており、飛鳥池工房の操業時期に遡る可能性がある。

竪穴状遺構 下段テラスの裾部で検出した。谷を浸食する後世の水流によって大半が削平され、わずかに東辺(長さ6.2m)の一部が残存するにすぎない。5世紀後半の



図94 竪穴状遺構と護岸石(南から)

遺構とみられ、壁際には周溝がめぐる。

南北溝 2 谷部の断ち割り調査をおこない、丘陵西裾、沼状堆積の下層で検出した。幅 2 m、深さ 50cm。溝内からは、7 世紀前半代の土師器や天理砂岩の切石が出土した。さらに、この南北溝 2 の下層には、幅 50cm、深さ 25cm の小溝がある。

南北溝 3 調査区の西端、谷の最深部で検出した。幅 90cm、溝内およびその周辺からは、直口で縦長の製塩土器が出土した。5 世紀に遡る。

4 出土遺物

土器、瓦類、木製品、鉄製品、土製品、石製品などが出土した。土器は、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器が大半を占め、ほかに弥生土器、ロクロ土師器、緑釉陶器、近世陶磁器が少量ある。瓦類は、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点、丸瓦 30 点 (4.6kg)、平瓦 161 点 (16.8kg) が出土。うち、軒丸瓦 1 点は飛鳥寺 I 型式 a である。その他の瓦もおおむね飛鳥寺所用瓦と見てよいだろう。

谷部の腐植土層からは、自然木、植物種子に加え、木製品が出土。板状に加工されたものが多いが、用途は不明である。習書木簡の断片も 1 点出土したが、書体・内容からは時期を特定できない。釈文は以下のとおり。

[佰カ]

・ 頭黒黒大麻呂者 □

□ □ 問其由 □

[勘カ]

・ □ □ 奈太 □ □ 奈太 □

(97)・(23)・3 019

鉄製品は、鉄斧、鉄釘、鉄滓が出土。いずれも工房関連遺物で、下段テラスから谷部にかけて出土した。土製品は、鞆羽口のほかに、土馬が 2 点出土。石製品は、縄紋時代の無茎石鎌が 1 点出土した。

5 まとめ

丘陵のテラスで検出した炉跡は、その構造や出土遺物から、これまでに飛鳥池遺跡で数多く検出した飛鳥池工房期の炉跡と一連の遺構と考えられる。この炉跡の発見によって、東側谷筋の工房群は南北 130m 以上の広がりをもつことが明らかになった。

飛鳥池工房はさらに南方に広がる可能性があるが、問題となるのは、調査区の南方に位置する酒船石遺跡との

関係である。

2000 年度におこなわれた明日香村教育委員会の酒船石遺跡第 14 次調査では、東側丘陵の西斜面に構築された石段および、亀形石槽から北方へ排水する石組溝を検出している。しかし、今回の調査では、これらに関する遺構は確認できなかった。石組溝をそのまま北に延長すると、今調査区の西端近くを通ることから、未調査に終わった谷の最深部に、亀形石槽からの排水施設が位置する可能性が高い。

一方、丘陵西斜面に構築された石段も今次調査区には連続せず、亀形石槽に関わるこうした石組は、谷の最深部の限定された範囲にとどまる可能性が高い。しかしながら、酒船石遺跡で使用された石材は、今次調査区にも濃密に分布する。亀形石槽や周囲の石組が平安時代まで存続する点を考慮すれば、丘陵テラスに構築された石垣や、谷部沼状遺構の護岸は、それらと対応する時期の施設であった可能性も残る。

今回の調査によって、亀形石槽の下流に沼沢もしくは湿地が形成されていたことが明らかになったわけであるが、この事実は、亀形石槽から流下する水流が人工的に調節されていた可能性を示唆する。

この点で想起されるのは、飛鳥池遺跡の東の谷筋に規則的に構築された陸橋と水溜遺構の存在である (第 98 次調査、『年報 2000 - II』)。おそらく、同様の陸橋が今次調査区の近くに存在し、水溜施設が沼沢もしくは湿地化したと考えるのが妥当であろう。つまり、酒船石遺跡と飛鳥池遺跡が共有する谷筋が、一連の排水処理システムによって管理されていた可能性があり、両遺跡の緊密な関係を窺うことができる。

以上のように、今回の調査では、7 世紀中頃に造営された酒船石遺跡と、7 世紀後半に操業が始まる飛鳥池遺跡の接点付近の土地利用の実態が明らかになった。両遺跡は今回の調査区付近で微妙に錯綜する可能性が高く、東側の谷筋に広がる空間を宮廷が一体的に管理していたことを推測させる。飛鳥池遺跡出土木簡群の中に、遺跡本来の性格とは異質な宮廷や天皇関係の木簡が含まれる事実は、この傍証となるのではないだろう。

今後は、両遺跡が、相互にどのような影響を与えながら展開、変遷していったのか、という観点からの究明が必要となろう。

(松村恵司・西川雄大)